

Title	ルネサンスと「史學」の復刊
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.1 (1948. 1) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯ルネサンス文化
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルネサンスと「史學」の復刊

間崎万里

ルネサンスの精神は近代史學の發生を促した一つの源流である。中世的なる宗教的羈絆を脱して、人間中心的な事物の見方、したがつて探索したる資料の比較検討と、文書の考證的取扱方に重きを置くところの近代史學は、フランスに端を發し(一)、ドイツにおいて大成したるものである(二)。そのために、我が國へ移植せられたものが、ドイツ系統のものであつて、リース博士がこれに多大の貢献をなしたることは(三)、人の知るところである。つとにドイツには一八五九年以來ヒストリッシェ・ヴァイトシリフトが續刊せられ、フランスには一八七六年にルヴュー・イストリーグが初號を出してゐる。我が國の「史學雑誌」はこれよりも十三年後の一八八九(明治二二)年に發刊せられたが(四)、それ等よりも遙かに若き我等の「史學」は、一九一二(大正一〇)年十一月に創刊せられて以來、一九四四(昭和一九)年十一月の第二十二卷第四號を以て、休刊の已むなきに至つた。その間、「史學」は年をけみすること二十三年間、號を重ねること合併號を含み八十八、別冊として「維新前の大官廷」および第一卷より第十五卷に至るまでの史學に對する。「史學總目索引」を出してゐる。すでに一九一〇年に創立せられた「史學」發行の母胎たる三田史學會は絶えず研究會を開いた外、講演會や調査旅行、考古學的發掘など、諸般の活動を試み、且つ圖書の出版をも行つてゐ

た。田中萃一郎史學論文集、ドーソン蒙古史、日吉矢上古墳、江南踏査などがそれである。また三田史學會同人によつての泰西名著の反譯が行はれ、歴史叢書十四巻が刊行せられてゐる。その中、私の擔當したる「ルネサンスの文化」は、この時期に特有なる名稱を與へたるヤコブ・ブルクハルトの名著、十九世紀における三大文化史の一に數へられるものである(五)。拙ない反譯は原著を汚すこと夥しく、慚愧にたへない次第であるが、その後更に數種の原著の諸版と共に二つの邦譯が加はり(六)、ルネサンスに對する内外の研究は、約九十年前の彼の舊著を介して、今なほ續けられ、議論はいまだ盡きないのである(七)。

- (一) 間崎万里、現代フランスの史學(「フランスの社會科學」所收)
- (二) 同、歐米の史學研究五十年(史學二の二)
- (三) 史學會小史、一九一二〇頁
- (四) 同上、二一頁
- (五) ゲーチ、十九世紀の歴史および歴史家、英文五八一頁、その文明史に關する章の拙譯は三田學會雜誌に載せてある。
- (六) 山岸光宣譯(春秋社刊)、村松恒一郎、藤田健治共譯(岩波文庫)
- (七) 特に東北帝大の西洋史研究會刊行の西洋史研究の諸集。

ヨーロッパに旅行せられたことのある方々で、現代のローマに、オスマニヤに、ポンペイに、その他諸地におけるローマの古跡を訪れたものは、その廢墟よりして過去のローマの雄大に、想到せられたことであらう。これにも比較せらるべき生々しい現代的廢墟、我等の戰災諸都市は、戰禍の大を思はせる外、いまだ史的興味を喚び起すほどの餘裕を我等に與へないのであるが、その中若干のもの、例へば我が三田山上における大ホールの殘骸の如きは、幾分ローマのそれを想はしめるものがある。大理石造に縁遠い我等の大ホールは、もともと赤煉瓦建を本體とするものであつて、石灰に燒かるべき好資材としての大理石が剥ぎとられた後に、赤煉瓦を露出するに至つたローマのそれとは聊か

趣を異にし、それとこれとの間には、到底及びもつかぬ文化の隔りがあつて、彼等のそれは單に雄大であるばかりでなく、眞に莊麗にして敬慕に價するものがあつたのである。

ブルクハルトは、ルネサンス期のローマの廢墟について、これらを訪れたものの心に映じたる思想の推移を美しく説いてゐる(一)。その一部を引用せんに、とりわけ荒廢の都市ローマ自身が『ローマの驚異』やマームズベリーのウイリヤムの雜纂書などに記されてゐた時代とは、聊か異つた種類の敬虔の念を以て見られる。信仰深き巡禮者、魔法の信者、寶物の盜掘者などの空想は、記録の上から次第に姿を消した。ローマの城壁の石は崇敬の念を以て見らるべく、ローマ市の建てられてゐる地面は人々の傳ふるよりも貴し、とするダンテの言葉はこの意味に解せらるべきものである。度々の記念祝祭も、特有な文學的作品の上には、何等の記念さるべき追憶を残してゐない。一三〇〇年の記念祝祭の最大の收穫は、ジョヴァンニ・ヴィラニがローマの廢墟の一瞥によつて喚び起された修史の志を懷いて故郷に歸つたことである。ペトラルカは古典的古代とキリスト教的古代との間における感情の分立を我等に報じてゐる。彼はジョヴァンニ・コロンナと連立つて、しばしばデオクレチアヌスの浴場(テルメ)の宏大的圓頂閣の上によぢ登つた有様を告げてゐる。澄み渡つた大氣の中、深い靜寂の裡、廣々とした四方の眺望の中にあつて、二人は事業や家政や政治のことを打ち忘れ、四圍の廢墟を眺めながら、歴史について談じ合つたが、ペトラルカはより多く古典時代のために、ジョヴァンニはむしろキリスト教時代のために辯じた。爾來ローマ史家のギボンやニーブルに至るまで、この廢墟の天地は如何にしばしば歴史的瞑想を喚び起したことであらうと註し、更に、同じ様な分立した氣持はファチオ・デリ・ウベルチの一二六〇年に編したデタモンドオの中にも示されてゐるとし、この架空の旅行記の中では、神曲においてヴェルギリウスがダンテを案内するが如くに、老地理學者のソリヌスがついてゐる。二人は順次諸地の聖跡に詣でてゐるけれども、古代ローマの異教的な偉觀が既に著しく重んぜられてゐる。すなはちボロを纏つた氣高かい老嫗が——これはローマ自身を示す——彼等に向つて光輝に充ちた歴史を物語り、また古代の凱旋式の有様を詳しく述べ

べ、次いで老嫗はこの外來者のために市中を隈なく案内し、二人に七丘と一大廢墟の故事來歴を説きあかし、『如何に私の過去が美しかつたかを、貴方にはお分りでせう』と説くあたり、我等の廢墟とは大きな隔りのあるローマの佛が次第にルネサンス的に浮んで来る。キリスト教的ではなく、想像の上における美はしのローマは慕はしのローマとなり、ローマ文化の再生を想ふの念がひしひしと迫つて來るのである。それは單にローマの建築だけに止まるものではなく、ローマからギリシヤに、更にヘブライの始源に溯つて復興を求めるルネサンスの探索は古代文化の再洗禮を受けて素晴らしい光輝を放つたことにそれるのである。

(1) J. Burckhardt, Die Kultur der Renaissance in Italien, Kröners Taschenausgabe, S. 166.

以下引用は本版による。

ブルクハルトは、ルネサンスの古代に対する關係を特に力説したる第三篇の序説において、我等の文化史的概觀もこの點にまで達したので、こゝで我等は古代（文化）についての考察を進むべき順序となつた。この古代の『復興』（ヴィダーゲブルート）は偏した仕方ではあるが、この時代の總稱となつてゐる。以上述べ來つた狀態は古代なくとも國民を搖り動かし、これを成熟させたであらう。以下述べようとする精神的新傾向も、その多くのものは、古代なくとも考へられうることである。がしかし、上來述べ來つたところと同じく、以下述べようとするところのものも古代世界の影響を受けて多様に彩られてゐる。さうして事物の本質はこれなくとも考へられ、存在しうるにしてゐる。現實に表現せられたところのものは、これありたるがため、これを通じてのみ考へられ存在したものなのである。もしるネサンスが平易に古代から引き離ちうるものであつたならば、その現實にありたる如き、あの様な高き、世界史的必然の行程とはなりえなかつたであらう。それ故、我等はルネサンスは單獨に西洋世界を克服したものではなく、その傍にあつたイタリヤの民族精神と密接に結合して成し遂げられたものであることを、本書の主要命題として飽くま

で主張しなければならぬ。」の民族精神がこの結合において保存せられたところの自由獨立の度合は一様でない。例へば新ラテン語の文學のみについて見れば、しばしば極めて僅少であり、造型美術およびその他多くの分野においては、これが著しく大である。その差はあるにしても、この同じ民族の互に遠く隔たつた二つの文化時期の間ににおける結合は一つであることを證明した。それは極めて獨自性のものであつたので、當然の理由もあり、成果の多いものでもあつた。

この様にブルクハルトが古代の影響を特に大きく見たことは少なからぬ異論を生んだ。ブルクハルトはルネサンスを中世の末期と直結せしめず、中世を飛ばして一舉に古代文化との關連を求め、古代復興の傾向を著しく力説し過ぎたのである。この點は、その著の校訂者グツツも言ふ(1)。彼の著述を不朽ならしめたるルネサンス觀の特色であつて、十九世紀の末葉に至るまで、この考へ方が史界を支配したとはいへ、その後において特に非難せられるこの缺陷はグツツの是認するところであつて、ブルクハルトに對して恐らく許さるべき唯一の反対は、彼が中世からルネサンスへの發展を、不斷に成長する過程の描寫に十分でなかつたことであらう(2)と言つてゐる。その他の異説に對しては大類博士の度々の紹介を見るべきである(3)。かくて近くはバーンズがその著において(4)、ヨーロッパ史における知力的潮流の一層批判的なる検討と最近の探索(リサーチ)は、ヨーロッパの思想および文化の發展關係についてのブルクハルトとサイモンヅのいはゆるルネサンスの誇張せられた見解に深甚なる修正を加へしめたといふことになつたのである。

(1) 上掲獨文一六一一二頁の脚註

- (1) 大類伸、ブルクハルトの『伊太利ルネサンスの文化』を讀む(西洋史研究第一集)
- (3) 大類伸、ルネサンスの概念(西洋史研究第一集)その他
- (4) H. E. Barnes, A History of Historical Writing, 1937. P. 99.

かくして今日の通説では、イタリヤ・ルネサンスその者は、要するに、十字軍の最後のものとルーテルの宗教改革の發端との間ににおける一世紀半の中に、ヨーロッパ文明の性格の上に起つた徐々にしてしかも深奥なる變化を加へた推移の一時期であつて、中世の諸制度が徐々に崩壊し、中にも中世的なる考へ方がその力を失ひつゝあつたと共に、他面において近代的社會と文化の證據が、初のほどは部分的にであつたが、時を経るにつれますます完璧の度を加へて出現し、財力と諸都市の國々イタリヤでは、アルプス以北の一層完全に封建化したる國土におけるよりか、逸早やく、且つ一層迅速に進展したのである。加ふるに絶好の機會の地、政治的不安と盛衰の速なるこの地において、中世文明の崩壊は人心に新たなる刺戟的な自由を與へるようと思はれて、推移の時期はまた大なる知力的活動の時代ともなり、教會の權威や組合の束縛を振りほどかうとしてゐた人々の熱烈なる好奇心と限りなき野望の前に新天地が開け、彼等の住める死すべき人間世界の光榮を新に理解せしめ、その財力と權勢と藝術的快樂と知力的満足を欲する人々に、限りなき希望を懷かせたのである。こゝに至つて、つひに覺醒したるイタリヤ人の用意したるこの豊沃な地に、古代文化の種子が落ち、數百年間、世人がこの時期を、上古のギリシヤとローマの文明の再生、即ちルネサンスであると思つたほどに、夥多の果實を生んだのである。しかるにこのイタリヤ・ルネサンスの文化は、古代の影響を蒙りながらも、第一義的に古代の復活によるものではなく、たとひその成生の條件は變りつゝあつて、その結果はいつも同じでなかつたとはいへ、たしかに中世に深く根ざしたものであつた。ルネサンスの時期はそれが定義されうる限り、渾沌たる變化の一時期であつて、なほ中世的なる多くのものと、識別し得る近代的なるものの多くと、更にそれ自身に特有なるものの多くが、共存してゐたのであつた。ルネサンスは中世の盛期と近代との間の間隙に架けられたる橋であつて、政治的社會的知力的の動搖に充ちたる獨自の時代であると言ふことになつたのである(1)。

(1) K. Ferguson, in A Survey of European Civilization, 1936, P. 381.

ルネサンスの橋を渡つて來た人間中心の思想は、アルプスの北、ドイツにおいては宗教改革となり、その西、フランスにおいては政治的社會的の革命にまで發展したのであつた。それが更にその他の國々に傳播して、受入れ國家の性格に應じて、種々の異つた姿容を呈することになつた。當初イタリヤにあつては、ブルクハルトも上に説くごとく、同じ國土において、たゞ時の隔りをもつ同一民族が古代の文化を復興したものなので、それは同質文化として、いとも見事に開花し眩しい光彩を放つことになつたのであるが、民族を異にし國土を變へた場合には、それとは異つた心理學的文化受容の法則がそこに働く譯である。

「植てみよ花のそだゝぬ里はなし、こゝろからこそ身はいやしけれ」（一）。我等の先覺、開明思想家福澤先生のパリの旅宿における述懐は、やがてその努力によつて歐米文化の移植に成功し、我國の新文明は明治・大正の發展期を通じて次第に培はれ、健かに成育しつゝあつたのに、昭和の現代に至りいまだ開花結實に至らずして、不幸にもペンは劍よりも強くない一時期のために挫折し、無暴の大戰は開かれ、萬策盡きて、つひに我等はあえなくも完敗したのである。ブルクハルトの言ふ如く、史上の急變が必然的不可避のものであるならば、我等の沒落は、正しくそれなのであつたかも知れぬ。やがてポツダム宣言による我等の民主政治の復活と、新憲法による基本的人權が、人類の過去多年にわたる自由獲得の歴史の集積として（二）、ともかく規則の上に確立することになつた。これもルネサンス精神の最後の行き場所なのであらう。

（一） 石河幹明、福澤諭吉傳第一卷三二八頁

（二） 新憲法第九十七條

ブルクハルトのルネサンスの文化の刊行（一八六〇）に先立つこと七年、一八五三年に創立を見たる我等の慶應義塾は、この一九四七年五月二十四日を期して、戰災後の復興に一步を踏出すべく、創立九十年祭の式典を擧げ、私學最初の光榮として天皇陛下の劃期的な御來臨を仰ぎ、歎切れよく読み上げられた左の御言葉を賜はつたのである。

『慶應義塾が過去九十年にわたり、我が國の文運に寄與して來たことを、深く満足に思う。戰災其の他により學業及び經營の上に、幾多の困難があると思ふが、福澤諭吉創業の精神を心として、日本再建の爲、一層努力することを望む。』

と、聖旨を奉じた我等は、微力をも省みず、再び劍よりも強きペンの力を復興すべく、義塾精神の本源に溯つて、塾祖の提唱された文化移植のルネサンスとして、こゝに先づ史學の復刊を見るに至つた。偏に大方の御支援を仰ぐ次第である。